

高岡市埋蔵文化財分布調査概報VI

——平成6年度、牧野・能町地区の遺跡分布調査——

1995年3月

高岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、富山県高岡市における埋蔵文化財分布調査の概要報告書である。
2. 当調査は、平成6年度の国庫補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査対象地は、高岡市内、旧市北部地域の内、牧野・能町地区である。
4. 現地調査は、平成6年4月11日から同年11月30日までの実勤20日である。
5. 調査関係者は、次のとおりである。

社会教育課長：野村一郎

課長補佐：森 忠夫

文化係長：大石 庄

係員：山口辰一

係員：根津明義

6. 調査及び報告書の作成に当たり、以下の各氏から指導・援助を得た。

(順不同・敬称略)

彼谷正元（地元）

小島俊彰（高岡市文化財保護審議委員）

島田修一（富山県埋蔵文化財センター）

杉村 修（牧野中学校）

林寺巖州（富山考古学会）

堀田利男（地元）

古岡英明（高岡市文化財保護審議委員）

7. 本書の執筆は山口が担当した。

凡 例

- 遺跡、埋蔵文化財発見地
- ▼ 弥生・古墳時代遺物採集地点
- ▲ 古代遺物採集地点
- 中世遺物採集地点
- 近世遺物採集地点

調査参加者名簿

現地調査

大谷知可子、尾山久美子、垣地慶子、曲本直美、坂林泰子、新谷晴紀子
高田えみ子、守井久子、道谷美奈子、中村恭子、西野千鶴、橋真理子
放生順子

整理

高田えみ子、守井久子、道谷美奈子、橋真理子

目 次

例 言

目 次

I 序 説	1
II 遺跡各説	5
1. 牧野地区の遺跡	5
2. 能町地区の遺跡	10
III 遺物各説	
1. 採集遺物	11
2. 個人所蔵遺物	11
3. 牧野中学校所蔵遺物	12
IV 結 語	15

挿 図 目 次

第1図 分布調査事業区分図 (1/30万)	1
第2図 調査対象地区分図 (1/10万)	2
第3図 調査対象位置図 (1/5万)	4
第4図 遺跡地図 (1) (1/1万5千)	6
第5図 遺跡地図 (2) (1/1万5千)	7

図面目次

- 図面 1 遺物実測図 採集遺物
- 図面 2 遺物実測図 個人所蔵遺物
- 図面 3 遺物実測図 牧野中学校所蔵遺物
- 図面 4 遺物実測図 牧野中学校所蔵遺物
- 図面 5 遺物実測図 牧野中学校所蔵遺物
- 図面 6 遺物実測図 牧野中学校所蔵遺物
- 図面 7 遺物実測図 牧野中学校所蔵遺物
- 図面 8 遺物実測図 牧野中学校所蔵遺物
- 図面 9 遺物実測図 牧野中学校所蔵遺物
- 図面 10 遺物実測図 牧野中学校所蔵遺物

図版目次

- 図版 1. 遺跡 牧野地区 1. 姫野諏訪社遺跡（東）
2. 姫野諏訪社遺跡（南）
3. 姫野諏訪社遺跡（東）
- 図版 2. 遺跡 牧野地区 1. 牧野金星遺跡（南西）
2. 牧野金星遺跡（南東）
3. 牧野金星遺跡（南）
- 図版 3. 遺跡 牧野地区 1. 中曾根館遺跡（南西）
2. 中曾根遺跡（南東）
3. 中曾根西遺跡（西）
- 図版 4. 遺跡 牧野地区 1. 楼館塚遺跡（北）
2. 楼館塚遺跡（西）
3. 楼館塚遺跡（西）
- 図版 5. 遺跡 牧野地区 1. 上牧野新庄川遺跡（東）
2. 上牧野新庄川遺跡（西）
3. 下牧野新庄川遺跡（東）
- 図版 6. 遺跡 能町地区 1. 鶯北新遺跡（北）
2. 鶯北新遺跡（西）
3. 旭ヶ丘遺跡（東）

I 序 説

高岡市の位置

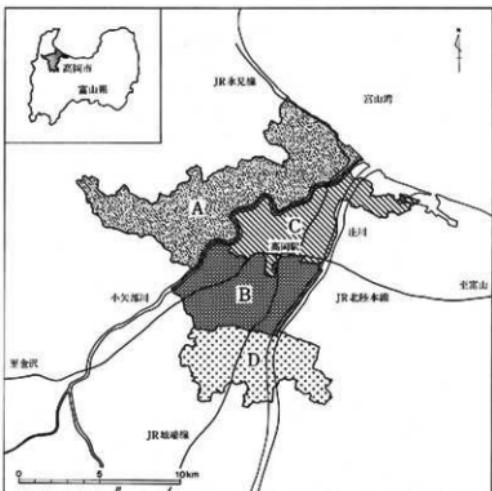
高岡市は富山県の北西寄りに位置する。北側は富山湾に臨む。東側は新湊市・大島町・大門町・小杉町と、南側は砺波市・福岡町と接する。また北側は、能登半島の基部東側を占める氷見市である。市域の大部分は、庄川と小矢部川の2大水系によって形成された沖積平野である。これらは、庄川による沖積扇状地部分と、庄川と小矢部川による沖積低地部分とに大別される。砺波平野の北半部と射水平野の西端部に当たる。一方北西部には、西山丘陵と、これに続く二上丘陵が走っている。

西山丘陵埋蔵文化財分布調査

小矢部川左岸一帯の西山・二上地域（西山丘陵・二上丘陵とその周辺の平野部）は、多くの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の所在地として知られていた。昭和50年代に入り開発工事や、開発計画が増大し、西山・二上地域での発掘調査が実施された。当地域に対する各種の開発行為が進むと共に、高岡市は、西山地区での総合開発を検討していた。このような状況の中で、当地域における遺跡の分布状況や内容の把握が、埋蔵文化財の保護上急務となってきた。以上のことから、高岡市教育委員会では、昭和58年度～昭和62年度の5箇年に亘り、国庫補助を得て「西山丘陵遺跡分布調査事業」を実施するに至った。その成果は各年度ごとに「西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報」I～Vとして刊行されている。

高岡市埋蔵文化財分布調査

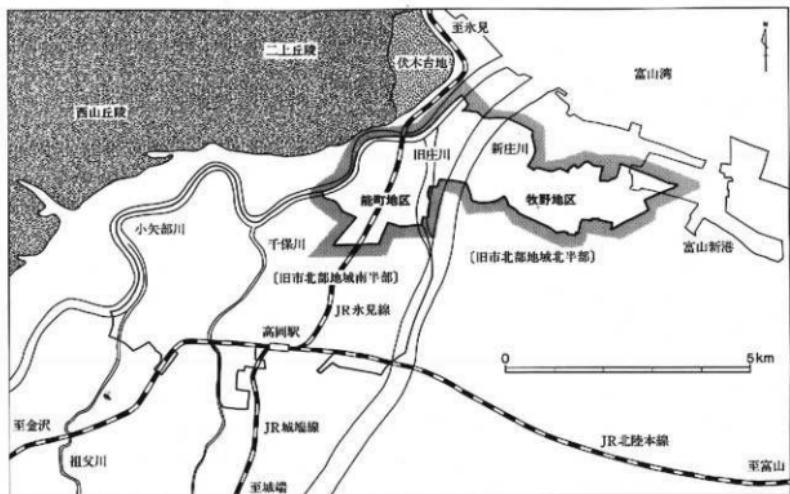
高岡市は面積15,000haを計る。この内約6,000haは、前述の通り西山丘陵分布調査として、分布調査が完了している地域である。平野部が主体を占める残りの9,000haの地域でも、数々の遺跡が存在し、数々の開発工



第1図 分布調査事業区分図

(1/30万)

- A. 西山丘陵地域
- B. 旧市南部地域
- C. 旧市北部地域
- D. 戸出・中田地域



第2図 調査対象地区分図（1／10万）

事がなされている。このため、西山丘陵地域につづいて、この地域でも国庫補助を得て、分布調査を実施することに至った。

広い地域であるので、3つの地域に大別した。市域の南部に当たる旧戸出町・旧中田町を1つの地域、そして残りの地域は昭和30年以前に合併した町・村よりなるので、これをJR高岡駅付近を基準に南北に分け、旧市南部地域、旧市北部地域と称することにした。それぞれの地域はすべて面積約3,000haを計るものである。そして「旧市南部地域」「旧市北部地域」「戸出・中田地域」の順で調査実施することになった。

旧市南部地域の調査は、平成元年度～平成5年度に実施した。この成果は「高岡市埋蔵文化財分布調査概報」I～Vとして報告している。

旧市北部地域の調査は、平成6年度・平成7年度の2箇年で実施するように計画した。旧市南部地域に比べて宅地化している部分が多く、実質的な調査対象面積が少ないと想定し、そして調査規模を拡大したことによってこのような計画となった。それぞれ対象とする地区は以下の通りである。

1. 平成6年度調査実施地区（旧市北部地域北半部）：牧野地区、能町地区 1,003ha
2. 平成7年度調査予定地区（旧市北部地域南半部）：野村地区、定塚地区、博労地区、平米地区、川原地区、成美地区、横田地区、西条地区 1,957ha

今年度の分布調査

以上のような経緯で、本年度は、旧市北部地域北半部の牧野地区と能町地区において分布調査を実施することに至った。牧野地区は、旧牧野村で牧野小学校下に該当する。面積503haである。能町地区は旧能町村の大部分を占め、能町小学校下に該当する。面積500haである。現地踏査は、4月と11月に実施した。

牧野地区の概観

牧野地区は射水平野の北西側、沖積低地に立地している。高岡市街地中心部の北東方約5kmに位置する。南北約2.5km、東西約5.5kmの範囲である。北側は新湊市街地であり、南側は新湊市の農村部である。東側は富山新港及び背後の工場地帯に臨む。西側はほぼ庄川の下流部までである。富山新港はかつての放生津潟を利用して昭和30年代末から40年代に造成された港湾であり、この直前の放生津潟は南北約1km、東西約2kmと狭隘な潟湖であった。しかし、繩文時代を中心に往時はもっと広大な湖や周辺の湿地帯が括がっていたとされている。牧野地区はこの放生津潟や付近の湿地帯の西側で、東側を走る庄川が下流に形成した三角洲帯である。この様な立地条件のため、標高は高い所で約2mでしかない。低湿地の中の微高地に集落等を形成し、発展してきた地区と言える。現在の庄川は牧野地区の西側を流れ、直接富山湾に注いでいるが、これは、明治末に工事が開始され、大正元年に完了した新庄川開削工事の結果である。それまでは能町で小矢部川と合流して、富山湾へと注いでいた。このため合流点付近を中心たびたび洪水がおき、改修工事が行われることとなった。牧野地区はこの新庄川の工事により、西側の地区が削り取られ、一部の地区が庄川の左岸に取り残される形となった。

牧野地区的遺跡、特に繩文時代～弥生時代の遺跡の成立を考える上で、上記のような立地条件から、気候の変動による海進や海退現象、河川の変動や土砂の運搬は重要な問題であり、これによって規制された面が大きい。

牧野地区は古代律令期の射水郡の一部であったことは確実であるが、射水郡10郷の内、どれに該当するかは不明である。古代末期以降の莊園公領制段階での文献に見えるものとして、先ず「曾根保」を上げ得る。これは『吾妻鏡』延応元年（1239年）条に見えるものである。この保は牧野地区の中曾根から北側の新湊市内三日曾根・四日曾根地区に比定されている。室町・戦国時代の文献には「姫野保」が見え、牧野地区姫野が該当するものとされている。中世でも南北朝時代のものとして、後醍醐天皇の第8皇子宗良親王（妙法院尊澄法親王）の伝承がある。奈良興浦（新湊市）に船着した宗良親王が3年ばかり牧野の地に隠れ住んだとするものである。伝承地は摸鏡原の上牧野地区と東弘寺等の下牧野地区である。

牧野地区的北西方、庄川・小矢部川を隔てた伏木台地は、奈良時代以来の越中国府の所在地である。北東側に接する新湊市の放生津には、鎌倉時代に越中の守護所が置かれ、その後も守護代の拠点となり、館や城（放生津城）が、設置されている。牧野地区姫野に北接する新湊市放生津小学校は、この放生津城の跡地とされている。

近代の牧野村はそれまでの、下牧野村、上牧野村、中曾根村、姫野村、金屋村、石丸村、堀岡又新村の一部が合併して成立し、その後高岡市と合併して現在に至っている。

牧野地区的遺跡の研究については、間坂儀三郎氏のものが主要かつ基本となっている。それは「放生津潟西岸の牧野地区内古代遺跡」と「牧野の今昔史」である。今回の調査及び報告においても、この成果を基本としていることを明記しておきたい。

能町地区的概観

能町地区は高岡市街地中心部の北北東側に位置する。南北約3.5km、東西約2.5kmの範囲である。東西を庄川と小矢部川に挟まれた地区である。北側は小矢部川を介して高岡市伏木地区となり、北東側は新湊市庄西町となる。南側には国道8号線が東西に走っている。大河の河口近くであり、射水平野の北西側隅部に位置し、標高は高い所で5m前後と低地となっている。庄川の改修工事まではよく洪水の影響を受けた地区である。この新庄川ができる以前は、地区の中央部を分断する形で、庄川が北流して小矢部川の下流部に合



第3図 調査対象位置図 (1/5万)

流していた。現在、河口部は工業地帯、南側は市街地中心部に近く住宅地帯となり開発が進んでいる。

歴史地理的観点からは、庄川と小矢部川の河口に近く、木町や伏木と言った交通・流通の拠点に近く、当地区の北東の吉久には加賀藩の御蔵が置かれていた。また、木町や高岡の中心部から放生津（現新湊市街地中心部）へと向かう街道筋に当たっていた。すなわち、南西側の江尻から、荻布・鷺北新・能町を通り、庄川を渡り、吉久を経て放生津へと向かう街道が当地区を縦断する形で存在しており、現在もその道をたどることができる。

近代の能町村はそれまでの、吉久村、宮中新村、六渡寺新村、能町村、鷺北新村、角村、吉久新村が合併して成立し、その後、掛開発村の米島、荻布、江尻を編入した。そして高岡市と合併して現在に至っている。今回の分布調査はこの旧能町村の大部分を含んでいるが、一部は次年度の対象地とした。

II 遺跡各説

1. 牧野地区の遺跡

11. 姫野源訪社遺跡

地元で「源訪宮」として呼ばれてきた「源訪神」を祭る神社の跡地である。現在は水田の中の長方形の土盛り地で、神社の跡地と伝えられ残されている。この土盛り部分は南北約10m×東西約14mを計る。西側は個人住宅であり、北側は水田であったが、最近開発が進み現在鉄錆となっている。昭和20年代までは、3本杉として、巨杉が3本立っていた。この祭式は神像や建物を持たず、土盛りをして樹木を植え、自然のまま拝むものであり、牧野地区には、下牧野、上牧野、中曾根西部、中曾根東部、金屋に同様なものがあったが、他の神社へ合祀されたり、耕地整理等の開発のため、この姫野源訪社遺跡以外は消滅している。この遺跡の南側は金屋地となり、牧野金屋遺跡が抜がっている。

12. 牧野金屋遺跡

牧野地区の「金屋」の地名は中世鉄物師が居住した名残とされている。すでに『高岡市史』において、当地から出土する酸化鉄粉を金屋鉄物師の遺物とし、放生津を本拠とする神保氏が鉄物師を招いた可能性が指摘されている。最近、久々忠義・林寺巣州両氏によって、この遺跡の紹介と歴史的位置付けがなされ、明確になった。遺跡の西側には西神楽川が北流し、東側には金屋神社が鎮座する。遺跡の範囲は南北400m×東西150mであるが、東側へはさらに拡がる可能性がある。現在は水田・畑地・宅地となっている。採集された遺物は土器類、須恵器、珠洲、常滑である。また林寺氏によって、土器類をはじめ、鐵滓、炉壁、鐵片等が採集されている。

13. 中曾根館遺跡

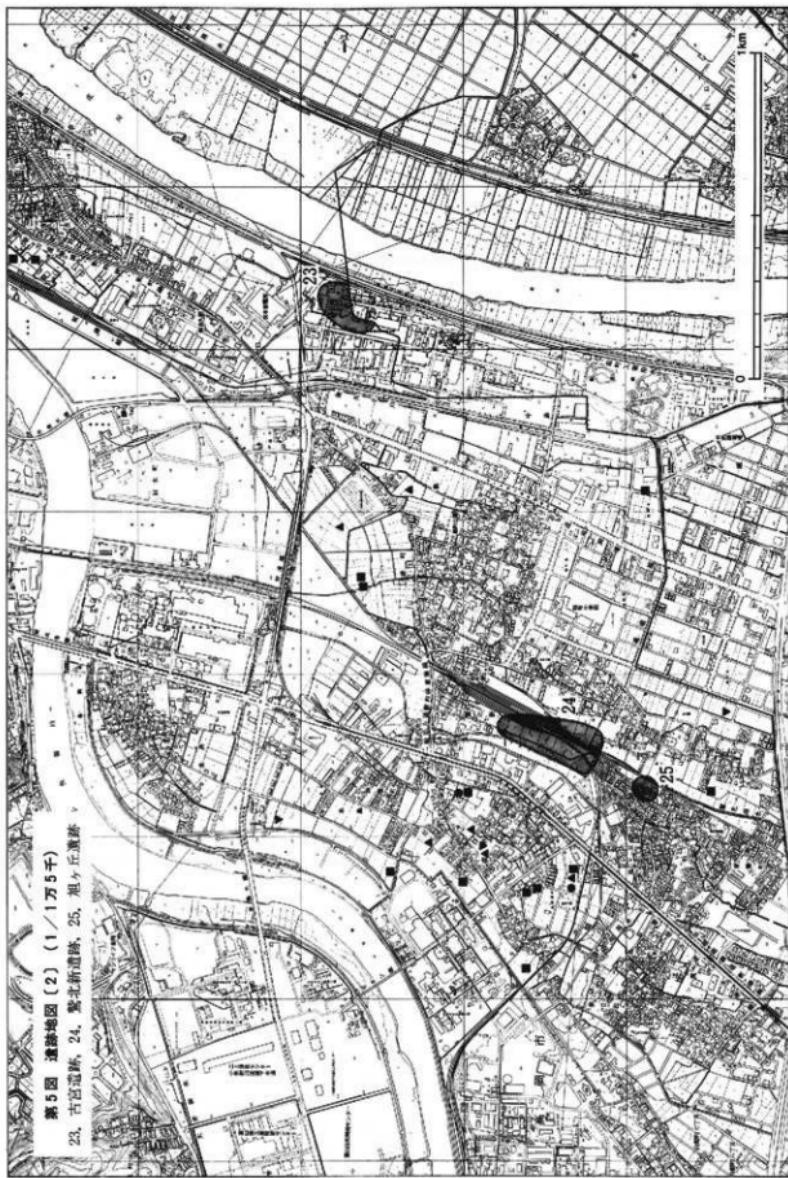
中曾根集落の東部に位置する。東側は西神楽川を挟んで金屋地区（牧野金屋遺跡）となる。間坂氏により、館畠地点住居址、館遺跡地、館住居址等とされてきたものである。弥生時代後期が中心であるが、土師器や珠洲等も出土している。遺跡の範囲は南北400m×東西350mとした。牧野金屋遺跡と接しているが、西神楽川を挟んでいることや、東側が金屋地区となることもあり、一つの遺跡とした。

14. 中曾根遺跡

中曾根集落の中央部、市立牧野公民館の南東側一帯が遺跡である。遺跡の範囲は南北400m×東西350mを計る。時期的には、弥生時代後期以降中世に至るものである。現在判明している主要な時期は弥生時代後期である。特に弥生時代後期後半が中心と思量される。また始まりは弥生時代中期になる可能性がある。間坂氏により中曾根中部の遺跡地帯として紹介されているものは互いに接しているもので、一つの遺跡と把握した。これらは以下のものである。

- | | |
|--------------------------------------|---------------|
| 1. 吉原田不詳遺跡地 | 5. 井戸址地 |
| 2. 吉原田炉址地 | 6. 宝町期を含む遺跡地 |
| 3. 金属滓凝集帶 2号地
(江濱地先金属滓凝集帶第1、2号遺跡) | 7. 奈良臼出土地 |
| 4. 住居支柱出土地
(江濱地先住居址) | 8. 旧光德寺隱居所遺跡地 |
| | 9. 水窪遺跡地 |



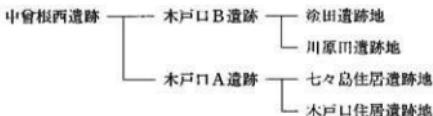


15. 中曾根北遺跡

中曾根地区の北側に位置する遺跡である。牧野小学校の東側一帯である。現在はほとんどが宅地化され、現地踏査によって遺物の採集はできない。しかし、過去には弥生土器や土師器が出土し、採集されている。間坂氏の光明寺敷在地遺跡地と漆師田木器出土地を合わせて1遺跡としておく。旧県遺跡地図ではNa198-井戸戸口B遺跡とされている地点も含んでいる。

16. 中曾根西遺跡

中曾根地区の西側に位置する遺跡である。間坂氏によって設定された次の4つの遺跡地は近接するもので、同一の遺跡として整理統合した。すなわち北東側の塗田遺跡地、北側の川原田遺跡地、南側の七々島住居遺跡地、最南部の木戸口住居遺跡地である。この遺跡は中曾根集落の西側、主要地方道新湊庄川線に沿って拡がっている。遺跡地帯の西側には現在牧野川が流れているが、この部分も含め、中曾根集落と西方の上牧野集落の間は、庄川の河川跡とされており、この河川の右岸の微高地に当遺跡が立地していったことになる。現在は宅地、水田、畑地となっている。道路付近は宅地化が進んでいる。範囲は南北700m×東西140mで、南側は新湊市側へ遺跡が延びている。旧県遺跡地図では、木戸口A遺跡と木戸口B遺跡とされていたものである。遺跡名及び各地点（遺跡）を整理すると以下のようなになる。



17. 三日曾根遺跡

下牧野地区の北東方、新湊高校の南西側隣接地付近が当遺跡である。現在は宅地となっている。縄文時代中期・後期の遺物、弥生時代～平安時代の遺物が出土したとされている。

18. 摂館塚遺跡

上牧野地区の長福寺は「牧野のあやまち寺」として著名である。この長福寺が伝えるものとして摂館塚の伝承がある。南北朝時代後醍醐天皇第8皇子宗良親王が、この牧野の仮宮に3年ほど隠れ住んだとされている。この建物は黒木の御館と呼ばれ、その跡地を黒木塚と称した。その後江戸時代に至り、長福寺により親王の記念碑が建立された。碑文には八宮摂館塚と彫されている。この摂館塚は上牧野の集落内、長福寺の南西約100mの地点に位置している。周囲は宅地及び畑地である。塚と称しているが、一辺3～4mの方形で、高さ20～30cmの土盛状の高まりがあるに過ぎない。この上で中心からややずれた位置に碑が立っている。これは、径約60.3cm、高さ約22.5cmの石臼の上に30cm角で高さ約92.5cmの方柱の石碑が立っているものである。牧野地区における宗良親王の伝承にはこの上牧野長福寺を中心とするもの他に、下牧野東弘寺を中心とするものもある。宗良親王が奈良油に着いたおり、土着のものが迎えて館を建て、皇子が住まいとされた。この地が新庄川開削のため移転する前の東弘寺の地であり、新庄川により、皇子関係の多くの伝承地が消滅してしまったとされている。なお、神羅社と宗良親王御旧跡の碑は、現在の下牧野東弘寺付近に移築されている。

19. 上牧野田島遺跡

上牧野集落の西側である。昭和36年に田島氏の畠土除去中に遺物が出土し確認された遺跡である。点的に確認されたものだが、現地踏査により、付近一帯からも遺物が散布している状況が判明したので、名称はこのままにして、遺跡の範囲を南北170m×東西180mと拡大しておく。

20. 上牧野宮袋遺跡

上牧野集落の南西方で、新湊市の宮袋集落の北東側である。遺跡の大部分が上牧野地区にあり、新湊市宮袋地区へも拡がっているものと推定されている。今まで宮袋遺跡とされてきたが、上牧野宮袋遺跡と改称しておく。遺跡の範囲は南北320m×東西260mである。時代的には弥生時代後期から古墳時代前期であるが、今回の踏査では、須恵器や珠洲も採集されている。

21. 上牧野新庄川遺跡

現在の庄川下流部は、高岡市の能町地区と牧野地区の間を北流して、新湊市六渡寺（庄西町）から富山湾へと注いでいる。これは明治35年から大正元年までの大工事の結果であり、それまでは、高岡市野村地区より北西に流れ、能町地区を経て小矢部川に合流していた。この工事により新たに開削された下流部を新庄川と称している。そして新庄川の河川敷部分から遺跡が確認されている。各報文等によりこれらを拾い出すと以下のようになる。

- A. 上牧野大野地先庄川右岸接岸面遺跡（住居地）。昭和37年8月に発見され、昭和38年8月、昭和39年8・9月に遺物が採集され確認された。間坂氏によって報告されている遺跡である。「大野地先庄川接岸地点住居址」、「上牧野大野地先庄川接岸遺跡地」と言った表現もある。
 - B. 下牧野地先、庄川原植土採取場内、砂岩石材遺跡。間坂氏によるものである。昭和37年8～9月に発見されたもので、石器等が出土している。
 - C. 上牧野、下牧野境界庄川原地帯、埋没林。間坂氏によるものである。間坂氏の上牧野大野地先庄川右岸接岸面遺跡に接する地点から下牧野地先庄川原にかけて発見された埋没林とされ、磨製石剣が出土したとされる。この磨製石剣は海老江氏の新庄川遺跡のものと同様なもので、同一地点か極めて接する地点と見える。
 - D. 新庄川遺跡。海老江久良氏の命名による遺跡名である。本江洋・吉久登・小島俊彰の3氏により「新庄川遺跡出土遺物の紹介」（『大火』第7号）として報告されている。昭和39年9月に粘土採掘の作業員により石剣が掘り出され、そして、海老江・本江・吉久氏により、遺物の収集と粘土採掘地の土層調査が実施された。遺物包含層は上層・中層・下層の3層があり、上層は須恵器・珠洲、中層は縄文時代晚期終末、乃至縄文時代晚期終末から弥生時代中期、下層は縄文時代後期に該当するもの、または該期の土器が出土しているとされている。この報文の付図で、当新庄川遺跡の南北側近接地点に「大野地先庄川接岸地点住居跡」が明示され、90m下流（北北東側=筆者記）の下牧野地内で、磨製石斧1点が出土したとされている。
 - E. 富山県史考古編。主に遺物の写真図版や実測図としてこの遺跡が取り上げられている。図録の説明として、「上牧野（新庄川断面下層）、上牧野（新庄川断面上層）、上牧野（新庄川）」となっている。概説の部分では、「上牧野地内の庄川断面」、「上牧野地内の庄川河底」と言った表現がある。
 - F. 地図等に見える地点。各報文等の付図や見取り図、遺跡地図で上記の地点を見るに、これらは、上牧野集落の西側から西北西側の庄川右岸河川敷であり、最北部（下流側）は下牧野地区の河川敷にかかっている。
- この遺跡の主要な弥生時代乃至これ以前の包含層は現地表より相当深い所になり、現在現地踏査をしても埋蔵文化財保護地の範囲を明確にすることは勿論、その推定も困難である。試掘調査等を別とすれば、過去の文献等を手掛かりにして、その範囲を設定するしか方法がない。

上記のCより、各地点は相互に密接した地点であり、距離にして150mを計るに過ぎないと思量される。位

置的には、上牧野地区の庄川河川敷部分を中心に上牧野地区と下牧野地区との境界付近にまで及んでいたと判断される。また密接した遺跡であり、それぞれ別の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）として設定する根拠に乏しく、現在の遺跡の把握から言えれば当然一つの遺跡として間違いないものと考え、1遺跡として扱いたい。名称については、本江氏らによる遺物の紹介や、旧県遺跡地図での使用により「新庄川遺跡」が人口に膾炙しているが、学史的には間坂氏の「上牧野大野地先庄川右岸接岸面遺跡」も重要であるが、やや冗長である。ここでは新庄川と言ってもある程度の流域を持ち、地区も理解できることを考慮して「上牧野新庄川遺跡」と命名したい。

22. 下牧野新庄川遺跡

下牧野集落の西方、庄川の河川敷に位置する遺跡である。土師器が出土したとされている。今回の踏査でも土師器が採集されている。旧県遺跡地図ではNo197一下牧野遺跡である。新庄川に位置していることと下牧野地区内とすることを考慮して、下牧野新庄川遺跡としておく。

2. 能町地区の遺跡

23. 古宮遺跡

新庄川の左岸、能町地区から新湊市官袋地区の境界付近に位置する遺跡である。奈良・平安時代の遺跡とされているが、宅地化が進み実体は不明である。

24. 鶯北新遺跡

小矢部川と川上川（下石瀬から能町へ抜け、小矢部川と合流していたものを仮にこのように言う）との合流点より南側の微高地に立地している。標高は約5mである。鶯北新集落の南側で、JR氷見線能町駅の南西方が遺跡である。現在は水田・畑地である。遺跡の範囲は、南北320m×東西140mであるが、宅地化やJR氷見線とのため確認ができず、もっと広がる可能性が強い。遺跡の北限より北側約200mの所に南西から北東へ向けて、荻野から鶯北新を経て、能町・吉久へ向かう旧街道が走り、この付近から北側は低地となる。地形的には、この旧街道付近まで遺跡の範囲である可能性がある。東側はJR氷見線が南北に走り、宅地化も進み明確にできない。南側は角用水が走り、この微高地を区画した形となっており、遺物の散布もこの付近まで見られることから、ここまで遺跡の南限とした。西側には、鶯北用水とその西側に赤堀川が北流している。西側は比高差が約2mあり、荻布集落を眼下に見ると共に、さらに向こう側の二上山丘陵をも望める眺望が良い所である。遺物の散布は遺跡範囲の南西側が最も多い。

遺物については、地元の彼谷正元氏所蔵遺物と今回採集したものがある。彼谷正元氏所蔵遺物は図面2に示したたるもので、燃し瓦の菊丸2点と土師質土錐が1点である。今回採集した遺物は、土師器・須恵器・珠洲である。土師器では赤彩されているものもある。これらの遺物から、遺跡の時代は、古墳時代から近世前期までとしておく。

彼谷正元氏によると、遺跡の中心部分と推定される部分は、以前高台であり、1mほど削り取ったとのことである。しかし、付近が宅地化や工場用地となるなかで、比較的原地形を止めている遺跡と言える。

25. 旭ヶ丘遺跡

昭和38年頃に旭ヶ丘周辺地帯の水田より発見され、土師器・須恵器が出土したとされている。現在宅地化が進み範囲や内容等が明確ではない。

III 遺物各説

1. 採集遺物

土師器

図面1-101の1点である。土師器壺の口縁部片で、鷺北新遺跡の採集品である。

須恵器

図面1-102-109の8点である。すべて鷺北新遺跡の採集品である。102, 103は高台付壺の底部片である。104-109は壺蓋である。104, 105が口縁部片で、106-109は天井部片である。104は口端部が短く下方へ屈曲するものである。105は口縁部が外方へ延びた後下方へ折れるものである。天井部片の106-109はすべてつまりが付くものと推定されるが、天井部中央が残存していない不明である。

珠洲

図面1-110-122の13点である。採集遺跡は以下のとおりである。

牧野金屋遺跡：118 上牧野田島遺跡：116, 120

中曾根遺跡：111, 113, 117, 122 上牧野宮袋遺跡：115, 119

中曾根西遺跡：114 鶯北新遺跡：110, 112, 121

110-114は擂鉢である。110が口縁部片、111, 112が体部片、113, 114が底部片である。115-122は甕である。115が肩部片、116, 117が肩部近くの破片、その他が胸部片である。

2. 個人所蔵遺物

菊丸

鷺北新の波谷正元氏所蔵の遺物である。波谷氏の先代が採集されたもので、鷺北新遺跡のものである可能性が高い。焼し瓦の菊丸2点で、図面2で示した。

201：三巴文の菊丸である。3つの巴文の周りに珠文が11個付く。直径9.2cm, 弁区径6.1cm, 周縁広1.6cm, 弁区での厚さ1.2cmを計る。瓦当部は一部欠損しているが、ほぼ残存している。丸瓦部は残存していない。

202：16弁の花弁の菊花文である。直径7.8cm, 中房径0.5cm, 弁区径5.6cm, 周縁広1.1cm, 弁区での厚さ1.2cmを計る。瓦当部は一部欠損しているが、ほぼ残存している。丸瓦部は一部残存しているに過ぎない。

土錐

鷺北新の波谷正元氏所蔵の遺物である。波谷氏が採集されたもので、鷺北新遺跡出土品である。図面2で203としたものである。土錐は球形なものに穿孔したものである。土師質であるが、焼成が良く、堅硬である。径5.7-5.8cm, 孔径1.4-1.5cmを計る。完存品である。

3. 牧野中学校所蔵遺物

概観

間坂儀三郎氏は長らく芳野中学校牧野分校（現在の牧野中学校）に勤務される傍ら、牧野地区に於ける遺跡の調査と遺物の採集をされた。その遺物が現在牧野中学校に所蔵されている。ここで紹介するのはこの遺物である。牧野中学校所蔵遺物については、『富山県史考古編』に図面や写真で多数報告されている。これは弥生時代中期、弥生時代後期、古式土師器とされている土器群である。重複する部分が多いが、遺跡理解の一助としてここでも使用させていただいた。

今回の調査時における状況は以下のとおりであった。

1. 木箱に収蔵されているもの。それぞれの木箱にはほぼ溝杯に土器を中心とする遺物が収蔵されている。やや大きい木箱（幅93、奥行32.5、高さ13.5cm）1個、小箱（幅45、奥行30、高さ9cm）23個である。
2. 中学校の一角に展示されているもの。

硝子ケースに収納のもの：土器類28点、土鍾3点。ケース外のもの：珠洲人甕1点、木臼1点

今回実測したものは図面3～10に153点示した。弥生土器・土師器・須恵器・珠洲である。所蔵遺物の中、土器類では極めて僅かではあるが陶磁器があるが、これは省略した。弥生土器で図示したものは弥生時代後期後半を中心としたものである。後期前半のものや古墳時代のもの（古式土師器）とした方がよいものや、論者によってはこの時代に位置付ける遺物である。上牧野新庄川遺跡出土の遺物で、弥生時代中期のものとされている土器類は、良好な口縁部片がほとんどなく図示していない。土師器・須恵器・珠洲は弥生土器に比べて極めて少量である。これらについてはできる限り図示するように努めた。

出土遺跡は、中曾根遺跡を中心に、中曾根館遺跡、中曾根西遺跡のものがある。それぞれの木箱には、遺跡名等を記した用紙が貼ってあるが、個々の破片すべてに注記されているわけではないので、違った遺跡の所へまぎれ込んでいる破片が存在する可能性がある。

弥生土器

図面3～8-301～418の118点である。

高环A 高环の环部、301～306である。外面に強い稜をなして口縁部は外反して外上方へ拡がる。大型の301～303とやや小型の304～306に細分できる。304は口縁部内面に段が付く。305は口縁部下方に6条の沈線文が通り、口縁部と底部との境の稜の部分に刻目文が付く、全面赤彩されている。

高环B 高环の环部、307である。外面に稜をなして口縁部は直線的に外上方へ拡がる。环部の体・底部は丸くなる。

高环C 高环の环部、308～310である。外面に稜をなして口縁部は内弯気味に外上方へ拡がる。高环Aの小型品と比べると环部が深いものである。

高环D 高环の柱状部、311、312である。円筒状の大型の柱状部である。柱状部外面は面取り気味にヘラ磨きされている。

高环E 高环の脚部、313～317である。外下方へ拡がる脚部である。315、317は透孔が4箇所に付く。

高环F 高环の脚部、318、319である。小型の脚部で、外下方へ拡がるものである。両方とも外面は赤彩されている。

甕A 有段口縁の甕、320～325である。外面に稜をなして口縁部はやや外反して外上方へ拡がる。口径

15~17cm代の320~323と12cm前後の324、325に細分できる。320~323の口縁部の調整手法はヘラ磨きが基調となっている。324は扁球形の胴部に有段の口縁部が付く。底部は欠損していて不明である。内面は口縁・頸部がヘラ磨きで赤彩、胴上・中央部がヘラ削り、削下部がナデである。外面は研磨・赤彩されている。外面胴下部に煤が付着している。325も胴部が扁球形になるものと推定される。

壹 有段口縁の壺 326、327である。有段口縁でも壹Aとやや違うもので、段より上方が長くなる。326は口縁部外面も刷毛目による調整となっている。327は326と比べて、さらに口縁部が長くなるもので、口縁・頸部はヘラ磨きされている。

壹C 小型壺 328、329である。小型壺の口縁片と底片である。

壹D 短頸壺 330である。球形の胴部に短い口縁部が付く。底部は2次の穿孔を受けている。全体的に磨滅しており、調整手法が明確にできない。

壹E 長頸壺 331、332である。長頸壺で有段口縁のもの。331は外面に稜をなして口縁部は外上方へ拡がる。332は外面に稜をなして口縁部は上方へ立ち上がる。

壹F 長頸壺 333~335である。長頸壺で直口のもの。333は口端部は横ナデによって、弱い稜をなす。334の口縁部は短い。335は外面にヘラ描きの文様が付く。

壹G 広口壺 336、337である。口縁部は外反して外上方へ開く。337は赤彩されている。

壹H 無頸壺 338、339である。やや大きい338と極めて小さい339である。

壹I 壺の胴部 340である。胴下部が脹らみここに胴部最大径がくる形態である。胴部外面はヘラ磨きされ、上半部は赤彩されている。

壹J 壺の底部 341~345である。

器台A 器台の受部 346、347である。口縁部は外面に強い稜をなして立ち上がる。器台Aと違い、口縁部外面に擬凹線文が付く。

器台B 器台の受部 348、349である。口縁部は外面に強い稜をなして立ち上がる。器台Aと違い、口縁部外面に擬凹線文が付かず、無文である。

器台C 器台の受部 350である。大型の器台で、口縁部は外面に強い稜をなして外上方へ開く。口端部は内外へ肥厚する。磨滅しており、調整手法は不明である。

器台D 器台の受部 351である。小型の器台で、受部は小型の皿形になる。全体的にヘラ磨き・赤彩されている。

器台E 器台の受部 352である。小型の器台で、受部は外上方に内窓気味に拡がり、口端部はやや凹んで、面取り気味になる。ヘラ磨き・赤彩されている。

器台F 器台の受部 353、354である。小型の器台で、受部は外上方に外反して拡がり、口端部はやや凹んで、面取り気味になる。ヘラ磨きされている。

器台G 器台の脚部 355~359である。小型器台の脚部で、外下方へ拡がるものである。

器台H 器台の脚部 360である。小型器台の脚部で、段をもつものである。

壹A くの字壺 361~370である。くの字壺の口・肩部片である。口縁部は横ナデ、肩部は内面がヘラ削り及び刷毛目。ただし、ヘラ削りが大半を占めている。外面が刷毛目である。口縁部の形態から以下のとおり細分できる。

ア. 361~364：口端部が挿み上げたように上方へ延びるもの。

イ. 365~368：口縁部が屈曲して外反するもの。

ウ。369～370；口端部が横ナデにより上下へ肥厚気味になるもの。

甕B 有段口縁擬凹線文の甕。371～379である。いわゆる「月影形甕」の口・肩部片である。口縁部外面に擬凹線文が付く。口縁部は横ナデ、肩部は内面がヘラ削り、外面が刷毛目である。372、375は口縁部内面に明瞭な指頭圧痕が付く。

甕C 有段口縁無文の甕。380～398である。口縁部外面に擬凹線文が付かないものの口・肩部片である。口縁部は横ナデ、肩部は内面がヘラ削り及び刷毛目、外面が刷毛目である。

甕D 有段口縁の甕。399～402である。口端部が丸みをもつて肥厚することと、器壁が比較的厚いことに、口縁部が外方に大きく開くことに特徴がある。口端部外面に擬凹線文は付かない。

甕E 403～405で、上記の甕の口縁部を中心とした分類に含まれないものである。403は外面に稜をなして口縁部は内弯気味に立ち上がる。404は口縁部が外反して外上方に拡がる。口端部は凹線気味の横ナデにより面をなしている。405は内傾した口端面に擬凹線文が2条付く。

甕F 小型の甕。406～408。有段口縁の小型甕の406、407、そして極小型の甕の408である。406は底部が穿孔されている。口縁部内面の形態は、段が付かずそのまま口端部へ移行する。407は甕Cの小型品である。408は口縁・肩部を欠如している。倒卵形の胴部になると推定される。胴上半部外面には指頭圧痕が付く。胴下半部外面は刷毛目である。

甕G 甕の底部。409～411。外面の調整手法は刷毛目である。

鉢 412、413である。412は楕形のもので、底面以外の調整手法は刷毛目である。413は無頸壺のなものとなっている。全体的に研磨され、赤彩されている。

瓶 414～418である。単孔小型の瓶である。414は直線的な口縁・体部に下方へやや突出する底部が付くこれに対して、415～418は体部からそのまま底部へ移行している。

蓋 419、420である。小型の蓋である。419はつまみ部の破片である。420は全体的に研磨されている。台部421～423である。蓋等の台部片である。

土師器

図面9～501～512の12点である。非ロクロ製の501、502とロクロ製の503～512に区分される。501、502は古代末～中世の土師器と推定される。503、507～512の底部が糸切りである。

須恵器

図面9～601～612の12点である。601～604は壺で、高台が付くものとそうでないものとがある。601は小破片のため口径等が不正確であるが、且乃至盤状の壺と判断した。底部の残存部分は全面ヘラ削りされている。608～610は壺蓋である。天井部中央につまみが付くものと判断される。611は横瓶の口縁部近くの胴部片である。612は甕の胴部片で肩部近くのものと推定される。

珠洲

図面10～701～706の6点である。701は甕で、胴上部に描き波状文が付く。口縁上部と胴中央部以下は欠損している。702、703は甕である。702は甕の口縁部の小破片である。703は底部を打ち欠いて（乃至底部が破損したので）井戸側として利用していたものである。いわゆる「甕井」である。形態はやや楕円形となる。法量は次のとおりである。口径65.2～72.8、口縁部外端径67.6～76.0、胴部最大径77.0～81.4、器高56.4cm。なお、この図は実測図と称するには不十分なもので、略測図程度のものとして扱ってほしい。704～706は摺鉢である。704は片口部分の小破片である。705はオロシ目が確認できない。706はオロシ目が密に付いている。

IV 結語

今回対象とした地区の遺跡については、新たに確認した埋蔵文化財包蔵地（遺跡）はない。現地踏査と資料整理を行った結果、既述のとおり、埋蔵文化財包蔵地の拡大と埋蔵文化財包蔵地の整理統合、そして遺跡の名称変更を行った。これについては、1993年発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』（「新県遺跡地図」とする）と1972年発行の『富山県遺跡地図』（「旧県遺跡地図」とする）記載の遺跡との対照表を「付図-遺跡一覧」として示したので参照されたい。

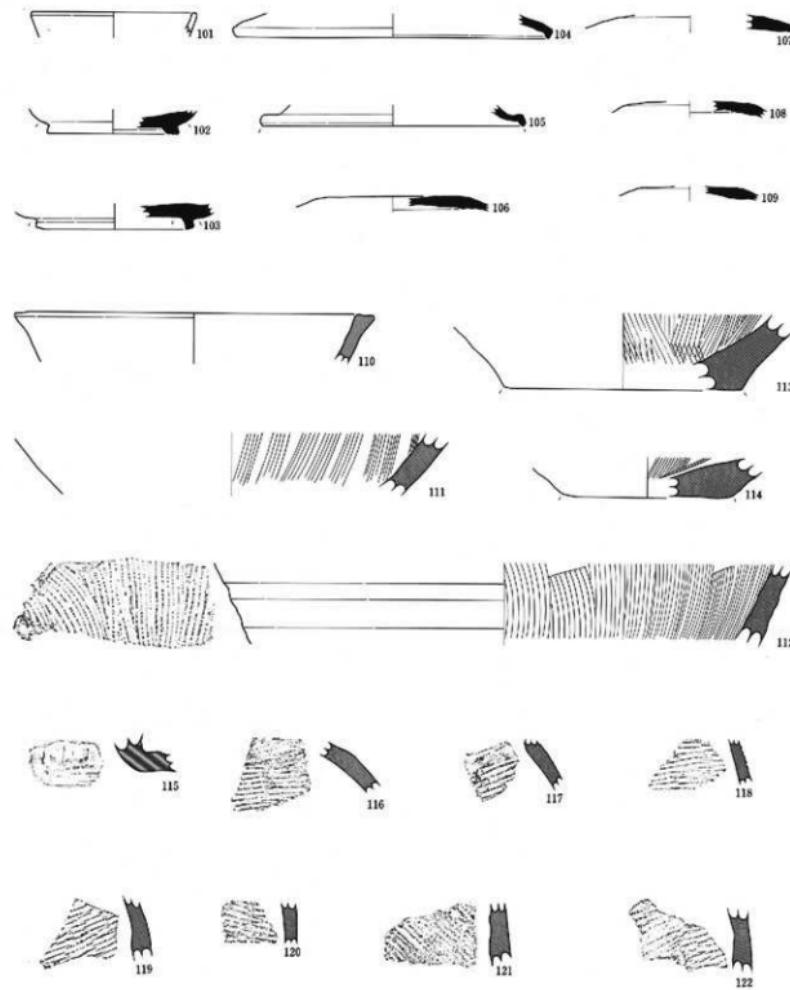
本報告書	新県遺跡地図	旧県遺跡地図	備考
11. 越野源訪社遺跡	202125 源訪社跡	190 源訪社跡	
12. 牧野金屋遺跡			
13. 中曾根館遺跡	202124 中曾根館遺跡	202 館遺跡	
14. 中曾根遺跡	202123 中曾根遺跡	201 井戸址A遺跡 203 古原田遺跡 204 江瀬遺跡	204は地図に記入なし
15. 中曾根北遺跡	202122 牧野小学校東遺跡	198 井戸址B遺跡	
16. 中曾根西遺跡	202120 木戸口A遺跡 202121 木戸口B遺跡	200 木戸口A遺跡 205 七々島遺跡 199 木戸口B遺跡	205は地図に記入なし
17. 三日曾根遺跡	202116 三日曾根遺跡		
18. 梅館塚遺跡	202119 梅館塚遺跡	195 梅館塚遺跡	
19. 上牧野田島遺跡	202117 上牧野田島氏畠遺跡		
20. 上牧野宮袋遺跡	202118 上牧野宮袋遺跡	196 宮袋遺跡	
21. 上牧野新庄川遺跡	202114 新庄川遺跡 202115 大野地先遺跡	194 新庄川遺跡	
22. 下牧野新庄川遺跡	202113 下牧野遺跡	197 下牧野遺跡	
23. 古宮遺跡	203021 古宮遺跡		203021は新湊市分として
24. 鷺北新遺跡	202126 鷺北新遺跡	145 鷺北新遺跡	
25. 旭ヶ丘遺跡	202127 旭ヶ丘遺跡	146 旭ヶ丘遺跡	

付図 遺跡一覧

参考文献

- 和田 一郎 1959 「高岡市史」上巻（高岡市史編纂委員会） 吉林書院新社
- 近村七四郎也 1964 「新湊市史」（新湊市史編纂委員会） 新湊市役所
- 重杉 俊雄 1964 「庄川」（庄川編さん委員会） 庄川右岸左岸水害予防市町村組合
- 藤井 昭二 1964 「地質からみた射水平野の形成と放生津潟の変遷」『放生津潟周辺の地学的研究』 富山地学会・第一港湾建設局伏木富山港工事事務所
- 間坂義三郎 1966 「放生津潟西岸の牧野地区内古代遺跡」『放生津潟周辺の地学的研究』第3集 伏木富山港工事事務所
- 大木和平他 1970 「和田川用水誌」 和田川用水町組合
- 上野 彰 1972 「概説—弥生時代付古式土師器」『富山県史—考古編』 富山県
- 坂井誠一他 1974 「角川日本本地名人辞典16—富山県」 角川書店
- 間坂義三郎 1977 「牧野の今昔史」『牧野小学校百年史』 高岡市牧野小学校
- 占岡 英明 1979 「流岡の水道前史」『高岡市水道史』 高岡市水道局
- 本江 洋他 1981 「新庄川遺跡出土遺物の紹介」『大境』第7号 富山考古学会
- 橋瀬 勝他 1984 「富山県史—通史編II中世」 富山県
- 松山 宏 1985 「室町時代の越中国の守護と守護所」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 国立歴史民俗博物館
- 森 茂徳 1988 「皇子たちの南北朝」（中公新書） 中央公論社
- 古岡 英明 1991 「たかおか歴史との出会い」（高岡市制100年記念誌編集委員会） 高岡市
- 久々 忠義 1991 「富山県大島町荒畠遺跡発掘調査概要」 大島町教育委員会
- 久々 忠義 1992 「放生津城を掘る」（新湊市民文庫11） 新湊市教育委員会
- 久々忠義他 1994 「射水平野の遺跡—神奈川流域を探るー」『大境』第14号 富山考古学会
- 射水郡役所 1909 「射水郡誌」（名著出版復刻版 1978）
- 富山県教育委員会 1972 「富山県遺跡地図」
- 高岡市児童文化協会 1990 「越中たかおか・ふるさと誌料抄」（児童文化シリーズ第6集）
- 富山県教育委員会 1993 「富山県埋蔵文化財団地図」

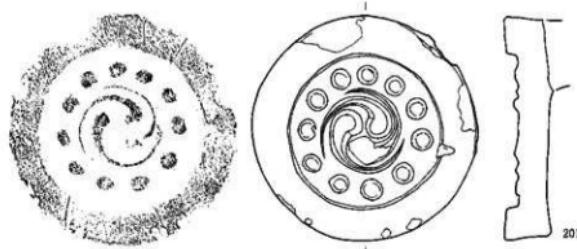
図 面



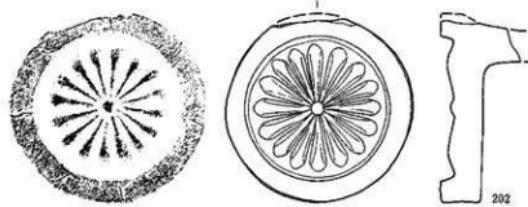
0 5 10cm

土器器；101，須恵器；102～109，珠淵；110～122

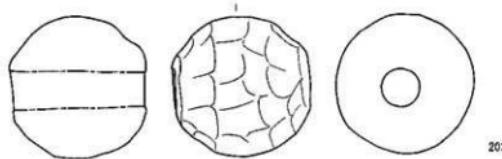
縮尺1/3



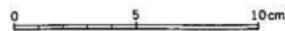
201



202



203

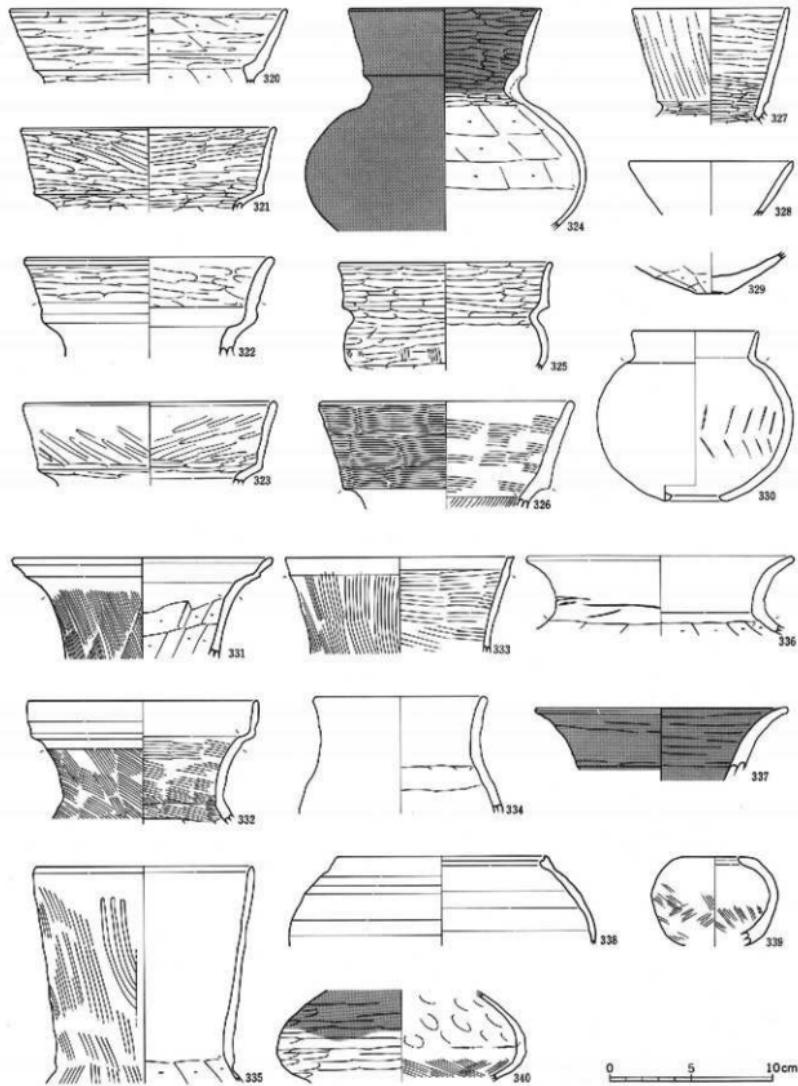




弥生土器 中曾根館；311、中曾根；301~310,312~314,316,317,319、中曾根西；318、

中曾根北？；315

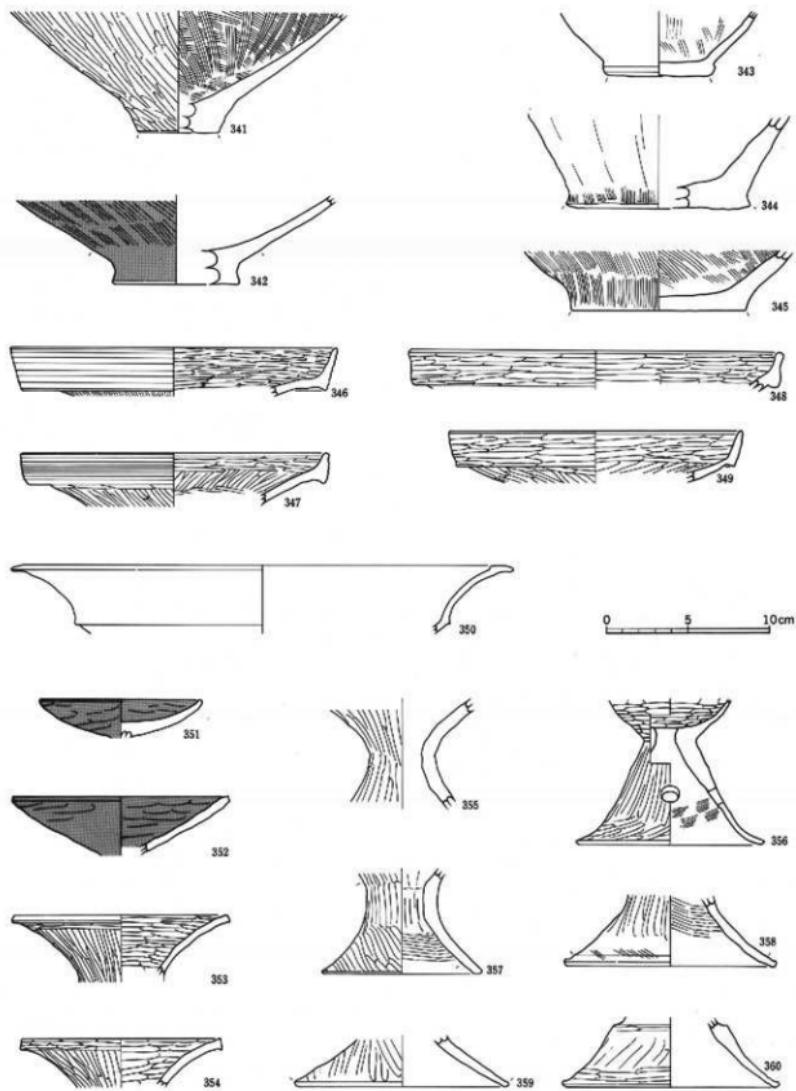
縮尺1/3



弦生土器 中曾根館 : 328, 329, 336。中曾根 : 320~323, 325~327, 330, 331, 333~335, 337, 339, 340,

中曾根西 : 324, 332, 338

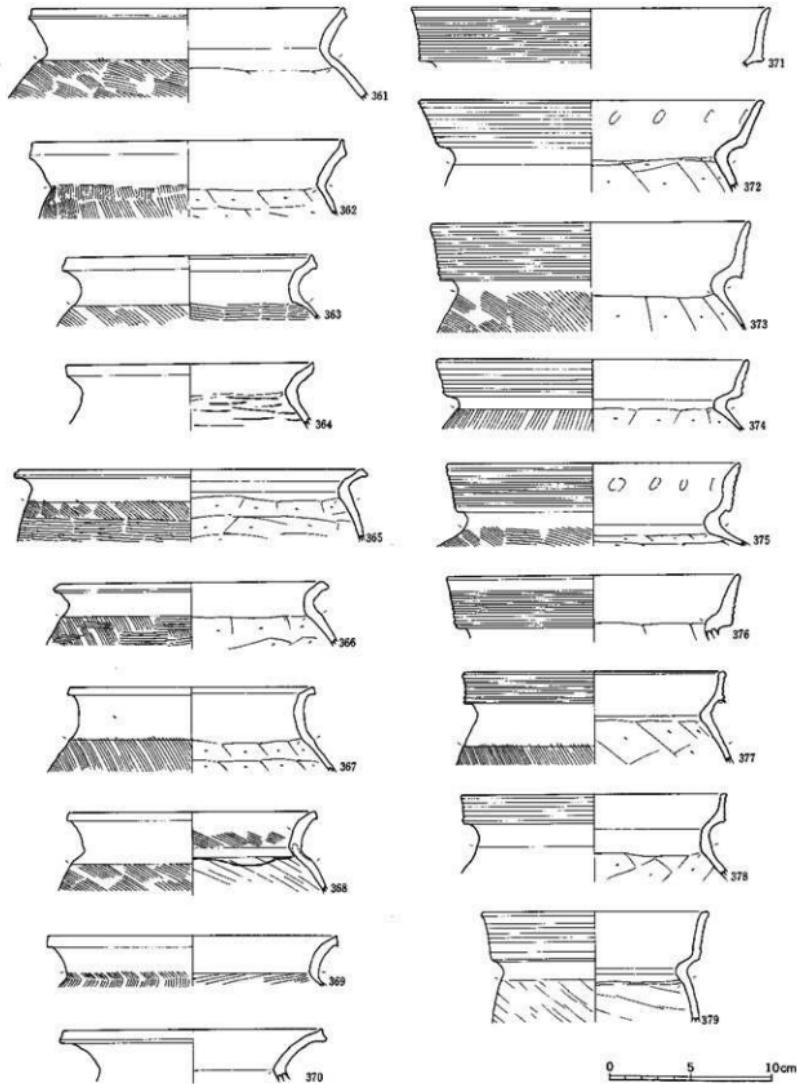
縮尺1/3



弥生土器 中曾根館 : 342, 343, 348, 356, 中曾根 : 341, 344~347, 349, 350, 352~354, 357~360,

中曾根西 : 351, 355

縮尺1/3

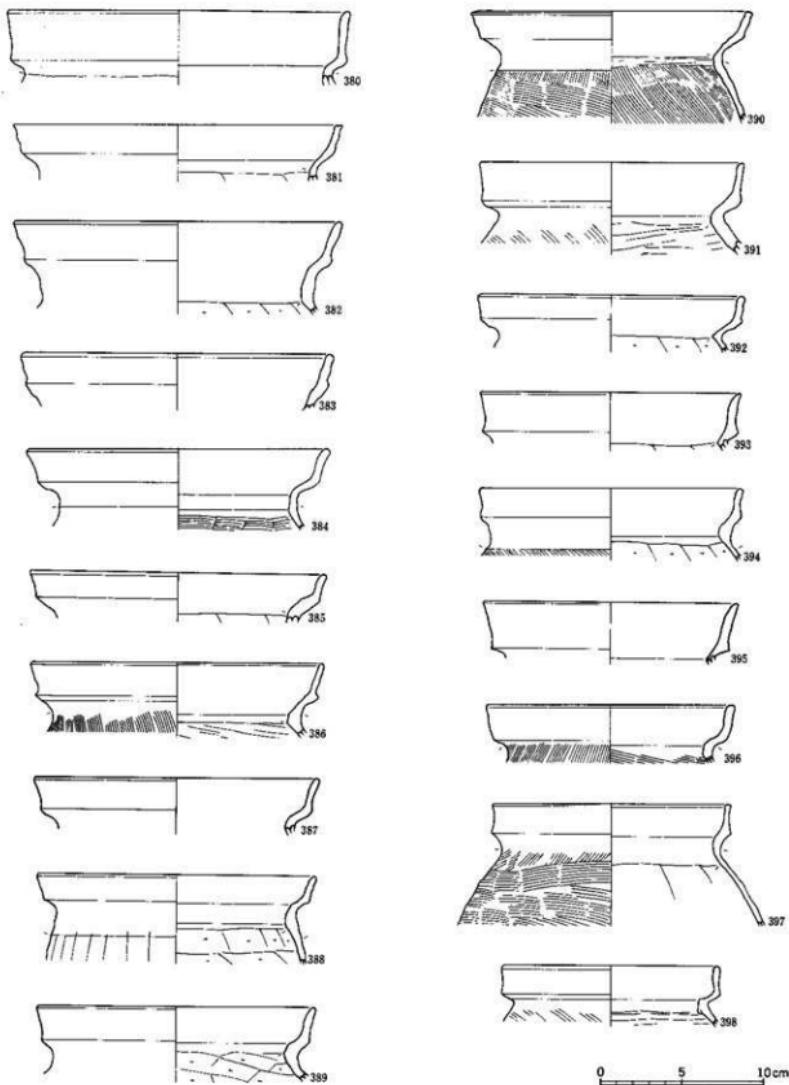


弥生土器 中曾根館 : 364, 368, 373, 中曾根 : 361~363, 365~367, 369~372, 374, 376~379

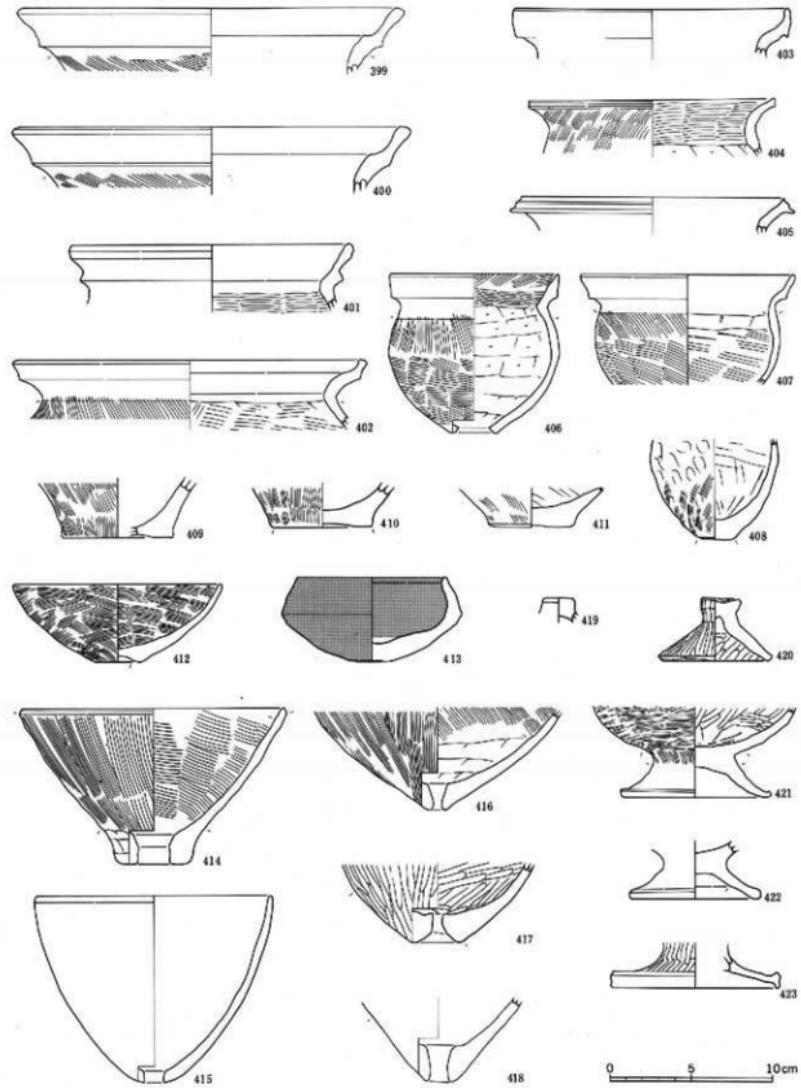
中曾根北? : 375

縮尺1/3

図面七 遺物実測図 牧野中学校所蔵遺物



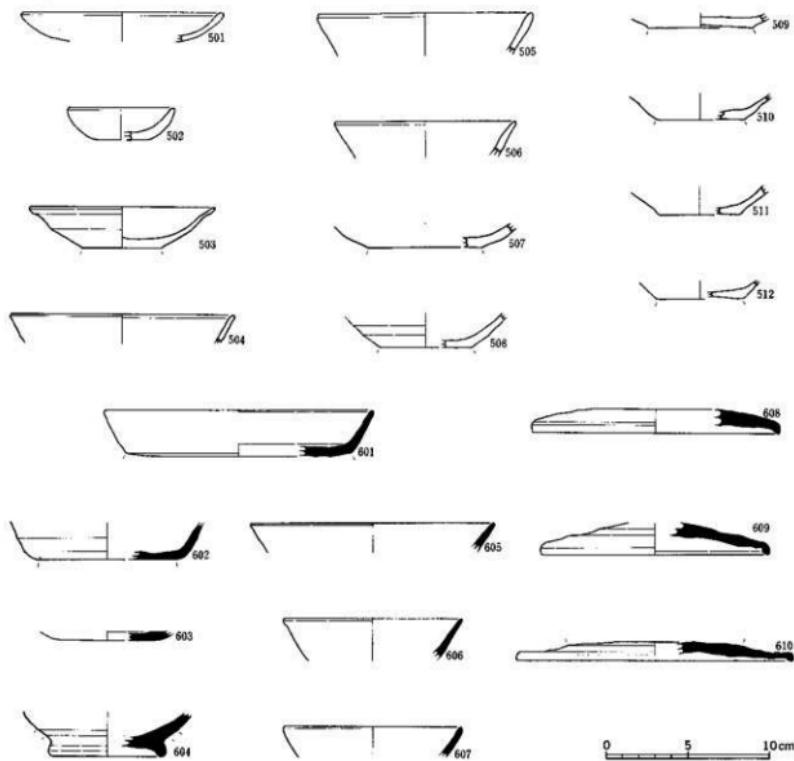
0 5 10cm



弥生土器 中曾根館：400, 404, 405。中曾根：399, 401~403, 406, 407, 411, 412, 414~423。

中曾根西：408~410, 413

縮尺1/3



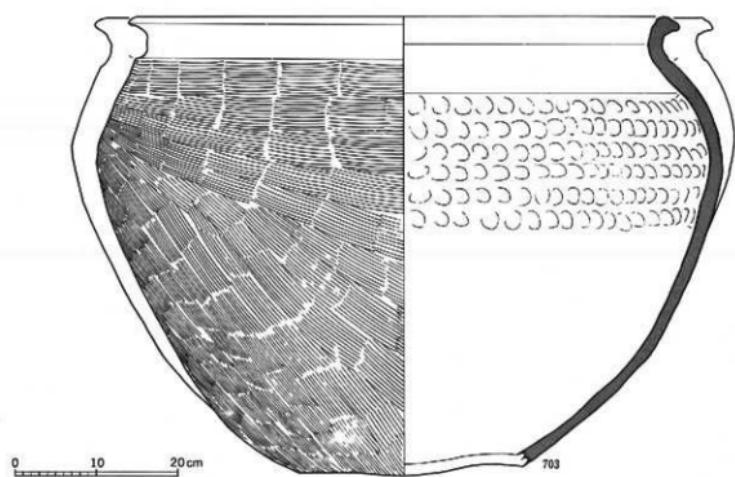
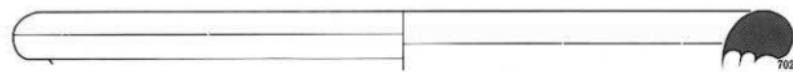
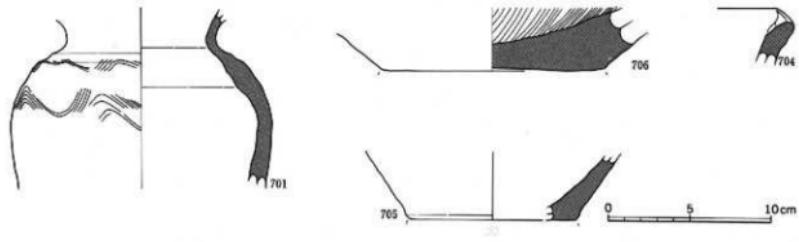
土師器：501～512、須恵器：601～612 中曾根館：612、中曾根根：601, 602, 608～610,

縮尺1/3

中曾根西：503, 505, 506, 605～607、中曾根北？：501, 502, 504, 507～512、不明：603, 604, 611

図面一〇 遺物実測図

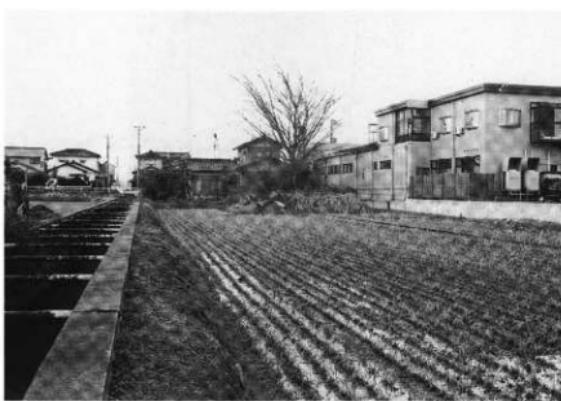
牧野中学校所蔵遺物



珠洲 中曾根館：701、中曾根：702～705、中曾根西：706

縮尺1/3、1/6

図 版



1. 姫野源訪社遺跡
(東)



2. 姫野源訪社遺跡
(南)



3. 姫野源訪社遺跡
(東)



1. 牧野金屋遺跡
(南西)



2. 牧野金屋遺跡
(南東)



3. 牧野金屋遺跡
(南)



1. 中曾根館遺跡
(南西)



2. 中曾根遺跡
(南東)



3. 中曾根西遺跡
(西)



1. 桃節塚遺跡（北）



2. 桃節塚遺跡（西）



3. 桃節塚遺跡（西）



1. 上牧野新庄川遺跡
(東)



2. 上牧野新庄川遺跡
(西)



3. 下牧野新庄川遺跡
(東)



1. 鶩北新道路（北）



2. 鶩北新道路（西）



3. 旭ヶ丘遺跡（東）

高岡市埋蔵文化財調査概報第28冊

市内遺跡分布調査概報VI

1995年3月31日

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市庄小路7番50号

印刷所 平田印刷株式会社
富山県高岡市野村1485番地